

# 人吉城歴史館の植物標本レスキューについて

岡本泰典

## レスキューの経緯

人吉市にある人吉城歴史館は、7月4日に球磨川の氾濫により浸水に見舞われ、植物標本を含め多くの収蔵品が泥水に浸かるという被害を受けた。被害の全容や、現地でのレスキュー作業の詳細は把握していないが、植物標本の搬出は10日頃から始まったとのことで、標本の腐敗が心配される夏場において迅速な対応がとられたといえる。

被災した植物標本は、前原勘次郎（1890～1975）の収集した植物標本約3万点である。前原は師範学校や高等女学校の教員を務める傍ら、熊本県南部の植物の研究に取り組み、1931年には『南肥植物誌』を出版するなど熊本県における植物研究の第一人者であった。そのコレクションは昭和初期の熊本県産の標本が中心で、新種記載に用いた「タイプ標本」が含まれる可能性も高いと考えられている。

標本被災の情報は、「西日本自然史系博物館ネットワーク」でまず発信され、続いて植物系学芸員のメーリングリスト上で国立科学博物館から救援要請が行われ、全国に広まることとなったそうである。これを受け、倉敷市立自然史博物館を含む35館（北海道から鹿児島まで！）が名乗りを上げた。さらに倉敷市立自然史博物館からは、同館友の会のメーリングリスト上で、レスキュー活動への協力が呼びかけられた。同館では、2011年に岩手県立博物館の呼びかけに応じて、陸前高田市立博物館の津波被災植物標本を修復した経験があり、その時のノウハウを活用できることも強みであった。倉敷への標本到着は7月19日で、即日レスキュー作業が開始された。

## 標本の状態とレスキューの手順

人吉の被災標本は、陸前高田と違い塩分除去の手間は無いが、水濡れ状態のまま計数や前処理なしで送付され、冷蔵庫で保管されている。倉敷が担当する点数は300点台である。

各標本は台紙に紙テープで貼られ、さらに新聞紙（当時の『大阪毎日新聞』など）で挟まれている。台紙や標本には水が浸透し、泥が被り、さまざまな色のカビが点々と発生し、さらに一部の標本は異臭を放ち、放置すれば間違いなく腐敗してしまう危険な状態であった。幸い、標本ラベルのインクは油性であるため、採集地や年月日などのデータは消失を免れた。

標本レスキュー作業が行われるのは、植物担当の狩山俊悟学芸員の都合がつく日で、午後1時から5時頃までである。作業は学芸員の指示監督のもと、館職員とボランティアの参加者が行っている。新型コロナウイルス対策のため、1回の募集人員は4名までという制限がある。さらに標本のレスキューは繊細な作業であるため、植物標本の作製経験のある人を優先している。作業にあたっては、コロナ対策のほか、標本に付着するカビや細菌による健康被害防止のため、ゴム手袋とマスク、エプロン着用を必須としている。

レスキュー作業ではまず、標本から新聞紙を慎重にはがす。この作業は標本を傷めないよう細心の注意が必要であるため、学芸員が行う。今回は人吉側の意向により、標本本体のほか台紙や新聞も含めてすべてを返却することになっているため、台紙から外しての洗浄・修復は行っていない。

処理前の写真撮影ののち、バットに張った水道水に漬けて筆で泥やカビを取り除く。植物本体をあまり強く筆で払うと傷める、ひいては重要な特徴が失われる恐れもあるので十分注意し、標本を損なう危険がある場合は泥落としを控える場合もある。

洗浄を終えた標本は、裏表両面からキッチンペーパーで挟み、手で押さえて水分を吸い取る。このキッチンペーパーを使う方法は神戸の史料ネットから教わったもので、陸前高田標本レスキューの時は新聞紙を使っていたという。

一連の作業を終えた標本は、吸水紙・スポンジ・新聞紙（現代のもの）で何重にも挟み、70℃の乾燥機に入れて48時間乾燥させる。この乾燥機は普段から標本の乾燥・殺虫に使用しているもので、これまでカビの再発生例はないとのことであった。

1回の処理点数は、植物の種類にもよるが（例えば常緑樹は葉が丈夫なので処理しやすい）だいたい20点前後とのことである。4人で4時間ほどかけることを思うと、いかに手間のかかる作業かわかる数字である。

## 迅速な対応ができた理由

被災から約2週間という短期間で、全国の博物館によるレスキュー作業が開始できた要因について、筆者なりにまとめてみた（ただし、館によって実施までの手続きが異なるので、全ての館が速やかに着手できたわけではない）。



植物標本から新聞紙をはがす



泥で汚れた植物標本



水道水による洗浄



キッチンペーパーによる吸水

第一に、自然史研究者、学芸員の緊密なネットワークの存在が挙げられる。普遍性の高い資料を扱う自然史分野では、もともと地域を超えた交流が盛んであり、口コミも含めた情報伝達の好条件に恵まれていると感じる。上述の通り、学芸員のメーリングリストはレスキューの要請に活用されたほか、レスキュー開始後も進捗状況やノウハウなどの情報交換が随時行われており、作業効率の向上にもつながっている。

第二に、植物標本という資料の特性がある。台紙に貼られた状態の植物標本は、形状がほぼ一定であり、研究者ならばその扱い方も共通しているので、他地域のものであっても対応が可能である。また、普段から宅配便による輸送が一般的に行われていることも、迅速な救済にはプラスに働いたであろう。

第三に、倉敷市立自然史博物館の作業については、同館友の会会員が担うところが大きい。同館の植物担当学芸員は1名のみであり、会計年度任用職員を含めても、大量の標本修復には到底人手が足りない。幸い、同館友の会には普段から標本の作製や整理のボランティアという形で、館の業務をサポートする会員が多数在籍している。彼ら彼女ら（女性が圧倒的に多い）の能力と経験、そして旺盛なチャレンジ精神とボランティア精神が、今回のような「有事」にも存分に発揮されているといえる。